

日文の

教育情報

子どもの自己肯定感をはぐくむ

1号

子どもの自己肯定感をはぐくむ

《特集》

子どもの自己肯定感を高めるために…………… p.2-3

公益財団法人さわやか福祉財団・弁護士 堀田力

母親の涙と言葉の力…………… p.4-5

大阪教育大学 園田雅春

《発信！北から南から…》

未来をつくる堺の教育！…………… p.6-7

堺市教育委員会

《クローズアップ！教育の現場》

牽引はトップの仕事…………… p.8

岐阜市立梅林中学校 竹市安彦

創刊のご挨拶

平素は格別のご高配を賜り、誠に有り難く厚く御礼申し上げます。

このたび、「日文の教育情報」を発刊する運びとなりました。教育界で話題になっている諸問題について、情報をご提供できるように努めてまいります。先生方のご参考になれば幸いに存じます。

お気づきの点などございましたら、ご意見ご感想をお寄せください。

日本文教出版株式会社

日本文教出版 Web サイト

最新情報はここから →

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

未来をになう子どもたちへ

日本文教出版

子どもの自己肯定感を高めるために

公益財団法人さわやか福祉財団理事長・弁護士
堀田 力

■ 自己肯定はすべての人の存在の基礎 ■

人は、自分の死期をさとった時、親しい人に、「自分は生きてきてよかったんだろうか。」などと聞くことがある。私も何人かに聞かれた。誰もが、とても不安そうな表情で聞いてくる。

そういう時、「あなたは、これこれのことをして相手の方を喜ばせたでしょう。今でも感謝しておられるよ。」と返事すると、とても安心した顔になる。

人は、最期まで、自分の存在意義を確認し、肯定して生きていくものなのだと思う。

大人たちが仕事や家事などさまざまな活動に励むのは、自分のためだけでなく、それによって人に役立ち、人から認められることによって自分が存在する意義を確認し、安心したいからだと言える。逆に仕事がなく、人から認められるようなことをしていないと次第に生きる意欲を失っていく。仕事の成果を否定された時も同じである。こういう状態が続くと、引きこもりになったり、ひどい時は自殺することもある。いじめによる自殺も同じ心理であろう。

子どもも大人も、元気に生きていくには、自己肯定感が必要なのである。

■ 自己肯定感是人との交わりの中で生まれる ■

人は集まって生きていく動物だから、人間性は集まって生きていくのに必要かつ有用なようにできている。人から愛されること(つまり、存在の肯定)は喜びだし、人からほめられたり、感謝されること(つまり、資質や能力、行為やその基礎にある人格の肯定的評価)も喜びである。人の評価を招く基となる能力が向上することも、同じく喜びである。喜びという快感を引き起こしてくれる環境にいと、楽しい。

逆に、人と離れ、孤立状態になると悲しく、淋しい。また、自分や自分を守ってくれる環境(家族から国まで)を非難、攻撃されること(つまり、自己存在の否定)は、怒りや憎しみの感情を引き起こす。このように、人間の感情は、多くは人や社会との関係で生じ、自己存在が認められる時は快い感情、否定される時は不快な感情が生じるようにできている。人は社会的動物なのである。

こういう当たり前のことをここで確認したのは、もちろん、生きていくために有用な行動をする動機となる快い感情を、より発達させる能力を培う子育てや教育の方法を探るためである。

■ 幼児のうちから人と交わる環境を最大限に ■

赤ん坊は、人にほほ笑む能力を持っている。いろんな人に抱かれて育てている子はあまり人見知りをしない。お互いに知らない幼な子が近づいていく過程は、感動的である。人が複雑な社会的動物であることを教えてくれる。

人間が産児制限を発明する以前の自然な状態では、生む子どもの数が一説によれば平均10人という動物であった。人間は、大家族という社会の中で子育てをしてきた。多産に伴う多死を克服したことは人類の大きな進歩であるが、少子化は同時に、「似た年齢の子どもと交わりながら育つ」という、人間性養成に不可欠の教育環境を失う副作用を起こした。



このマイナスを是正することが最大の課題である。こども園を、親の便宜ではなく、子どもの人間性を育てるという視点から運営しなければならない。地域社会も全面的に協力したい。

子どもたちは自然に交わり、協働して遊ぶ方向に成長していく。

似た年齢の子と一緒にいること自体が、共感の喜びをもたらす。協働して遊べるようになってくると、そこで自分の能力を生かすことの喜び(仲間が自分に賞賛の表情を示す)、協働作業に役立った自己肯定感、仲間と協力し合ってお互いの能力を認めながら)目的を遂げた時の達成感は、一人でやった時の何層倍にもなることを実感できる。

これは、大人(親または教師)と子どもとの関係によっては、学び、育てることができない大切な人間性である。

そしてそれは、成長して大人の社会に入った時、特殊な研究所などを除いて、企業、団体その他の組織からまっさきに求められる人間性なのである。

■ 学校教育も同じ視点で ■

他者と交わり、協働することで自ら身に付ける人間性の重要性を考えれば、「学校」という場を、教師が児童、生徒に教える場であると同時に、児童、生徒が相互に交わり、協働する場としても重要視すべきである。その意味で、放課後の校庭開放が広がりつつあることは歓迎できるし、いわゆる「タテ割」の自然な普及も効果大きい。生活科や総合的学習の時間は、児童、生徒の自発的なグループ学習という原点を忘れないことである。

いわゆる知識学科は、知的能力の成長による喜びを体感させ、自己肯定感を高めるという目的に立ち、苦痛を伴う暗記ではなく、考え、理解し、納得することの快感を味わわせる授業を行いたい。“ミクシ”(なぜか)を問う授業である。

体育や音楽等の授業でも、創造の喜びと協働による喜びを体感させる工夫をしてほしい。

■ 教師や親の責務 ■

教師や親は、最小限度、子どもの自己肯定感をそこなってはならない。子を支配しようという度合いが大きいほど、子どもの自己肯定感、人間性はそこなわれることを自覚しなければならない。基本的ルールを教えるにしても、「それは人に迷惑をかけるから」という理由を、わかるように教えることである。

あとは、我慢して子どもの自覚を待ち、子どもが成長を見せた時は、敏感に成長を示す言動を拾い上げてほめることである。

「ほめる」ことの効果の大きさは、自分がほめられた時のことを思い出せば、すぐにわかるであろう。具体的な行動をほめることにより、そういう行動をし続けようとインセンティブを引き出すことが大切である。

自己肯定感を高める切り札は、ほめることだと心得ておきたい。



● 著者プロフィール ●

堀田 力 (ほった つとむ)

公益財団法人さわやか福祉財団理事長・弁護士

1934年京都府生まれ。1958年京都大学法学部卒業、1961年検事任官、1976年東京地検特捜部検事としてロッキード事件を担当、1991年法務大臣官房長を最後に退職。同年、弁護士登録、さわやか法律事務所及びさわやか福祉推進センター(現 公益財団法人さわやか福祉財団)を開設。

母親の涙と言葉の力

大阪教育大学 教授 園田 雅春

講義が終わり、研究室で一息ついていると、ドアをノックする音がした。

「どうぞ」と告げると、学生のSさんが現れて突如こう切り出した。

「私、不登校だったんです……。」

先ほどの講義で不登校に関する話をしたのを、彼女は聴いていたのだ。

入口に突っ立ったままの彼女を座るよう促し、ゆっくり話を聴くことにした。

「先生に私のことを聴いてもらうのはうれしいです。でも、私、途中で泣いてしまうかもわかりません。」

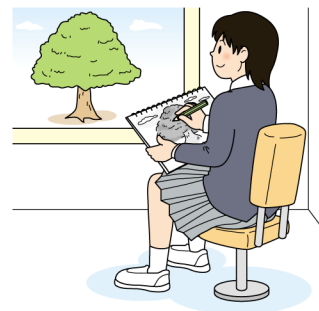
このように前置きしながら、彼女は話し始めた。

■ 子どもが自分の輝きを取りもどす時 ■

「中学3年の夏が終わり、学校に行くと、教室にいる女子も男子も、なにやら自分のことをウワサ立てているように思えて仕方ありませんでした。授業が始まると、教室にいることがとてもつらくなってきて、鉛筆を持つ手に汗がにじみ、背中にも汗が流れるのがわかりました。つぎの日から、学校に行くことがとても苦しくなり、保健室にたどり着くのが精いっぱいでした。」

それから「保健室登校」がつづいた。

「ある日、保健の先生は私に絵を描くことを勧め、先生も描きました。描き終わるとそれを見せ合うのですが、先生は私の絵を細かい所までよく見て、感心してくれました。私が家の中の絵を描いた時には『このカーテンの模様が素敵』と。また、大きな木を描いた日には『この木、枝ぶりがすごくいいわ』といった感じで……。」



担任の先生はときどき保健室にきて、あるときは手を引くようにして、教室に連れて行こうとした。教室に入った彼女は、しばらく授業を受けていても、その内、気分が重たくなってきて、手に汗がにじみ出す。そしてまた、保健室へ倒れ込むようにしてもどってしまう。

こんな日々がつづいたという。そのような状態から教室にもどれるようになったのは、いったい何がきっかけだったのか。尋ねようと思っていると、彼女はこんなことを話してくれた。

「ある日の夜、妹は部活でまだ帰っていなかったので、母と2人で食事をはじめました。そのとき、急に母が私に向かって言ったのです。『周りの人みんながあなたの敵になったとしても、お母さんは絶対にあなたの味方をするからね……。』母はそれだけを言うと、テーブルに泣き伏してしまいました。」

昼間も、そして夜も勤めに出て、私たち姉妹のために働いてくれている母。父と離婚すること

を自分たちに話をしてくれた時も、涙ひとつ見せず、朗らかに話をしてくれた母。

「その母が、いま私のことで泣いてくれている。その時、私は気づいたんです。私は一人ぼっちじゃなかったんだと……。」

翌朝、目が覚めると、彼女は自分でも不思議なほど身体じゅうに元気がみなぎってきて、さっさと学習の準備をして、教室に向かうことができたという。

「あのころの私は死ぬことばかりを考えていました。でも、その日以来、まるで人が変わったみたいに元気になれたんです。」

彼女は晴れやかに語りつづけた。話を聴いている私は涙をおさえることができなかった。

■ さまざまな「教育問題」の根っこ ■

クラスメイトから疎外感をいただき、孤独な気持ちに打ちひしがれていたとき、母親が自分に涙ながらに発してくれた言葉。彼女はその一言で「私は一人ぼっちじゃなかったんだ……」と、強く実感したのである。自分のことを気にかけてくれている人がいる。自分の存在を認めてくれている人がいる。自分のことで涙を流してくれる人がいる。自分をこんなに支えてくれる人がいる……。

このようなことを実感できる時、それは「自尊感情」のひとつを獲得する瞬間なのである。「世界がどのようにあなたを評価しようとも、私はあるがままのあなたが好きです。」¹

この言葉は究極の自尊感情ともいべき「核心的自尊感情」が育まれる至福の言葉である。彼女が母親からもらった言葉はそれに通底する決定的な言葉だったのだ。

しかしながら、最近の調査によると「自分はダメな人間だと思う」²と答えた中学生は、米国4.7%、中国3.4%、韓国7.9%に対して日本20.8%。「自分にはよいところがあると思いますか」³という質問に「当てはまる」と答えた小6は32.5%、中3は24.0%。

いずれも悲しい数値ばかりである。

子どもの自尊感情を集団的に形成すること。これがいじめや荒れ・学習意欲の低下等々、今日のさまざまな教育問題を解決するための根本命題だと思えてならない。学校が地域・家庭と共にこの命題に本腰を入れて取り組めば、子どもの笑顔と向上心は案外早く回復できるにちがいない。

1 グロリア・スタインム著『ほんとうの自分を求めて』中央公論新社 1994年

2 日本青少年研究所「中学生・高校生の生活と意識—日本・アメリカ・中国・韓国の比較—」2009年

3 国立教育政策研究所「全国学力・学習状況調査集計結果」2012年



● 著者プロフィール ●

園田 雅春

大阪教育大学教授

1948年京都市生まれ。大阪府高槻市立小学校教員ののち現職に。専門は教育方法学。

2012年3月まで附属平野小学校校長兼務。「授業文化を創る会」代表。

著書『いま『学級革命』から得られるもの』（明治図書）、『ふだんの授業からつくる総合学習』（明治図書）、

『学校はドラマがいっぱい—育てよう自尊感情』（法蔵館）、『若い教師が元気の出る7つの提言』（明治図書・共著）、

『シティズンシップへの教育』（新曜社・共著）など多数。

未来をつくる堺の教育！

～「総合的な学力」をはぐくむ堺市の取組～

堺市教育委員会

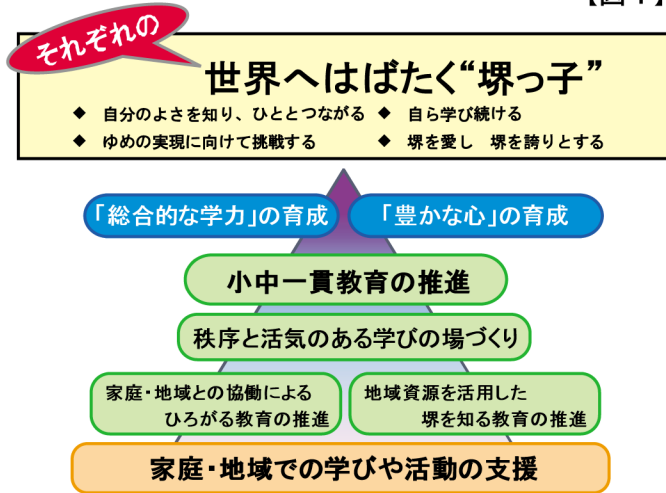
① 未来をつくる堺教育プラン

平成23年2月、堺市教育委員会では教育振興基本計画にあたる「未来をつくる堺教育プラン」を策定した。

本市では、児童生徒が自らを律し、生涯にわたって主体的に学習し、社会形成に参画できるよう、「総合的な学力」を伸ばし、「それぞれの世界へはばたく“堺っ子”」を育成することをめざしている。【図1】

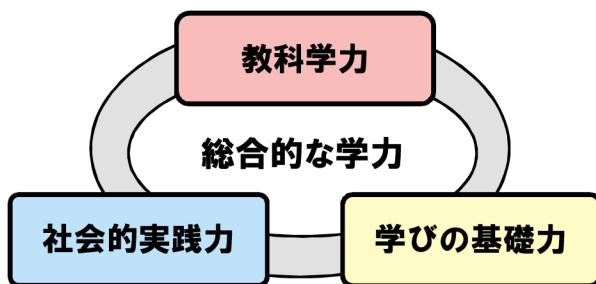
各施策の推進にあたっては、子どもの発達段階に応じた一貫性のある「縦につながる教育」、学校・家庭・地域との協働による「横にひろがる教育」、そして、子どもの実態分析と課題把握に即した検証改善を行うことが重要と考えている。

【図1】



② 「総合的な学力」の育成

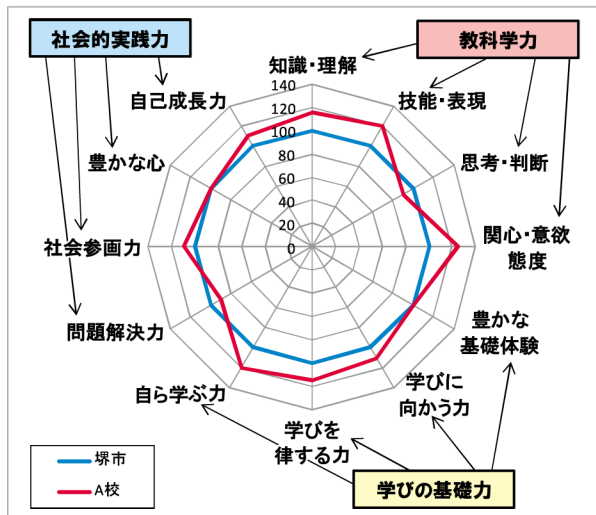
3つの力を総合的にバランスよく育成 【図2】



◆「総合的な学力」の構造

本市では、“堺っ子”に身につけさせたい「学力」を単に「教科の学力」だけでなく、自ら学ぶために必要となる学習意欲や好奇心、基本的な学習・生活習慣を含めた「学びの基礎力」と、身に付けた知識技能を社会で活用し実践する際に必要となる問題解決力やコミュニケーション能力等の「社会的実践力」の観点から多面的・総合的にとらえて「総合的な学力」としている。【図2】

【図3】



◆総合学力プロフィールでの学力分析

この「総合的な学力」の考え方にに基づき、全国学力・学習状況調査の分析結果を、学校の学年・学級別のレーダーチャートにより可視化したのは堺市が全国で初めてである。現在、毎年度の本市独自の学力等実態調査（次ページ参照）をもとに作成した学校の学年・学級ごとの「総合学力プロフィール」を全校に配付している。【図3】

各学校はそれをもとに、自校の強み弱みを全教職員で客観的に分析・共有し、授業や学校運営の改善に生かしている

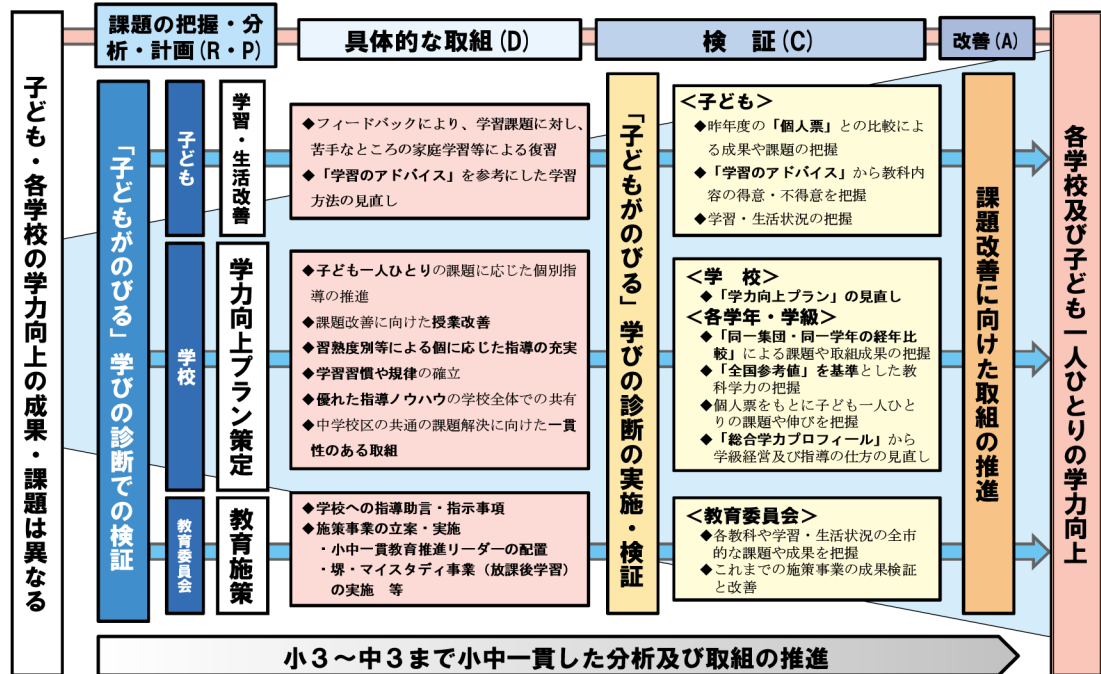
③「子どもがのびる」学びの診断を中心としたR(リサーチ)-PDCAサイクルの確立

◆「学びの診断」の趣旨・内容

本市では、「子どもがのびる」学びの診断として、**毎年度継続して**独自の学力等実態調査を実施している。【対象：小学3年～中学3年の全児童生徒 内容：国語、算数・数学、英語、質問紙調査】

学びの診断の特長は、義務教育9年間を見通し、「子ども」「学校」「教育委員会」各々の観点から、きめ細かな診断が可能となるよう制度設計したことである。【図4】

【図4】 「子どもがのびる」学びの診断による学力向上への取組

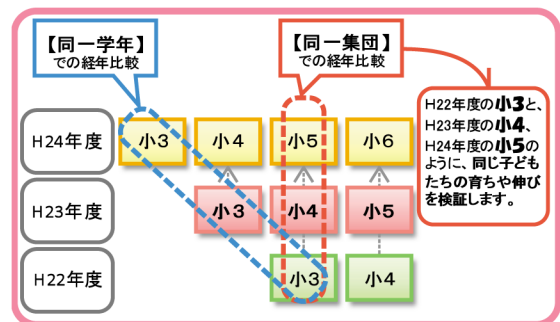


◆きめ細かな経年比較・分析を可能に

児童生徒に返却する個人票を蓄積し、比較することで、子どもが自らの伸びや課題を把握できるとともに、一人ひとりの発達・成長・課題に応じた個別支援の充実を図ることができる。

対象学年全員に毎年度実施し【同一集団】と【同一学年】2種類での比較分析を可能としていることから、学校では教育活動の成果や課題をきめ細かく客観的に把握できる。【図5】また、11月に調査を実施していることで、その年度内に課題を改善することができるようになっている。

【図5】



④小中一貫した「総合的な学力」の向上に向けて

◆全中学校区に「小中一貫教育推進リーダー」を配置

これまでの「子どもがのびる」学びの診断の結果分析から、学力や学習規律の意識、自尊感情等については、小学校高学年から段差が見られるなどの課題が明らかになった。

本市では、これらの改善には、義務教育9年間を見通した取組が有効であると考え、43中学校区すべてに、小中学校の生徒指導や学習指導体制のコーディネートを行う「小中一貫教育推進リーダー」を配置している。

◆「小中一貫教育推進リーダー」の役割

推進リーダーは、小学校での授業の兼務や、小中合同の研修や行事のコーディネート等を行っている。合同研修では、各学校の学びの診断結果の報告等も行われ、中学校区での子どもの育ちの成果や課題等の共通理解が図られている。また、中学校区全体の学力向上プランの作成や相互の授業研究も進んでおり、それぞれの校種における授業改善に効果が見られている。

牽引はトップの仕事

岐阜市立梅林中学校
校長 竹市安彦

校長は牽引役

校長 10 年間は生徒指導困難校に赴任することが多く、落ち着きと活気ある学校づくりが常に命題でした。学校を安定させるためには、反社会的問題への対応もさることながら、大多数の普通の生徒に有用感や意欲を生み出す視点が必要です。トップの決断で、職員、生徒、保護者、地域が結束できれば、学校に安定が生まれます。そのためには、トップである校長が、学校の牽引役でなければなりません。良くも悪くも、一番学校を変えていく役割を担っているのは校長です。



明快なプラン発信

学校経営方針に、格調高い理想論を並べても、校長の自己満足です。まず、職員や生徒がこんな学校にしたい、共に実現しようという気持ちが湧かなければ経営方針になりません。職員はもちろん、生徒や保護者は、校長の明快なメッセージ発信を求めています。

職員にとってみれば、学校は目標やスローガンだらけです。教育目標から学級や学年の目標、更に教科や特別活動等々、ありすぎて覚えられません。正直に言うと、何をどこから手を付けたらよいかわからないのではないのでしょうか。結局は自分の範囲だけやることになり、結束力は低下します。

校長が、これだけは誰もが共にやろうという基本であるプランを発信すると、拠り所となります。

「志プラン」の実施

私は、前年度の 1 月に平易でメッセージ性あるプランを職員に提示し、次年度の教育計画作成に反映してもらいます。職員の共通理解と協力を得て、次年度のイメージを作ることを大切にしています。4 月の職員会で経営方針を出しても手遅れだと考えます。4 月、職員は計画を実行する段階です。

校長としては、あれもこれもと示唆したいことは多々ありますが、プランを代表する文言を知ってもらうことに心がけ、同じことばかり主張します。それを繰り返し聞いているうちに浸透します。やがて、皆が同じ文言を使ってくれるようになり、プランが波及します。

本校では、職員や生徒はもちろんですが、保護者や地域にも発信しています。プランタイトルの「志」ロゴ入りのポロシャツも作成し着用しています。



学校を普通にする

生徒指導困難校が普通の学校になったのですが、取り組みは容易なものではありません。様々な協力や支援があったことは言うまでもありませんし、この文面に具体的なことは記しきれません。

ただ言えることは、校長がトップとして、職員、生徒、保護者、地域にプランを発信・牽引したことで活動ベクトルが生まれてきたのではと実感しています。